

## 教員活動状況報告書

提出日：令和 6 年 3 月 2 日

所 属：生命・環境科学部 国際コミュニケーション研究室

氏 名： 城山光子 職位：講師

## I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）				
生命・環境科学部全学科の英語教育の授業を担当している。医療を含めたライフサイエンスの英語発信力の獲得を主な目的に、基盤的・専門的な内容の教材を選定・作成している。				
科目名	学科・専攻	必、選、自	配当年次	受講者数
基礎英語	食品生命科学科	必修	1	19 人
基礎科学英語	食品生命科学科	必修	1	19 人
基礎科学英語	環境科学科	必修	1	22 人
基礎科学英語	臨床検査技術学科	必修	1	40 人
英語講読	食品生命科学科	必修	2	22 人
ライティング基礎	食品生命科学科	必修	2	17 人
医学英語	臨床検査技術学科	必修	2	45 人
卒業論文	臨床検査技術学科	選択	2-4	1 人
リサーチローテーション (分担)	環境科学科	必修	2	76 人
2. 教育の理念（育てたい学生像、あり方、信念）				
<p>医療を含めたライフサイエンスの英語発信力の獲得は本学の学生にとっても必須の課題と考える。学生の学力や進路の希望は極めて多様であり、それに合致する基盤的・専門的な内容の教材を用いた英語教育を行う必要があると強く認識している。</p> <p>英語は既に国際共通語としてあらゆる分野で使用されている。学生が、本学卒業後に英語を使ってビジネスや研究を行う場面をイメージし、積極的・自主的に学習に取り組むことを目標としている。</p>				
3. 教育の方法（理念を実現するための考え方、方法）				
<p>学生の学力や進路の希望は極めて多様である。それに合致する基盤的・専門的な内容の英語教材を提供する。ビジネスや研究の分野で頻用される英語表現や英単語は具体的な使用方法の説明が必要で、私自身がビジネスや研究の分野で使用してきた経験を元に教育成果を上げるとともに、自らの経験自体も積極的に学生に伝えるように努めている。</p> <p>英語論文の作成や国際学会での発表、あるいは国際的なビジネスの場で専門分野の英語を用いて情報発信や意見交換ができるように、アプトプットは重視すべきである。専門的な説</p>				

明になるが、アウトプットを意識した効率的かつ圧倒的多量のインプット、スラッシュ・リーディング、音読、シャドーイング、リプロダクションを授業に積極的に組み込んでいる。

#### アクティブラーニングについての取組

全員が毎回の授業で1回以上発言することを原則としている。特に基礎科学英語では、学生が一人ずつ教室の前方で英文を暗唱し、クラスメイトがコメントするピア評価を取り入れ、学習効果を向上させている。

#### ICTの教育への活用

上述の課題を効率的に実践するためにICTを活用している。本学で標準使用されているLMSの「學理」や「AzaMoodle」はICT教育の効率化に非常に有用である。試験、アンケート、および課題提出に積極的に活用している。試験では、学生各自の点数を匿名化した上でグラフ化し、クラス全体の習熟度を学生も教員も把握できるようにしている。

#### 4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

##### ① 教育（授業、実習）の創意工夫（A）

英文の指名訳出だけでなく、英文2文毎に教材の音読や暗唱を取り入れ、参加者の意欲と集中力の維持に努めている。

ライフサイエンスの英語は分野に固有の専門的な英単語が多いが、逆に語源、接頭辞、接尾辞の知識を身につければ効率的なインプット・アウトプットが可能となる。講義をしながら、その成果が上がっていることを実感している。学生からも、接頭辞の解説が「単語の記憶の向上に大きな影響を与えた」とのコメントがあった（アンケート抜粋）。また、イラストや写真も用いて視覚的にも理解できるよう努めており、この方法も有用であることが確認された。

##### ② 学生の理解度の把握（A）

以下の(1)～(4)ように理解度把握を試みている。オンラインのみの参加者も十分に授業内容を理解できていると考える。

(1) 教室巡回時には理解度を常に確認している。

(2) 復習小テストを毎週実施し、一部の試験では結果をグラフにし、可視化している。

(3) 学生による英文の訳出を予習必須課題としている。

(4) 学生による英文の音読は基本的には集団で行うが、個別に音読を希望する学生もあり、効果が一層望める方法を選択している。

##### ③ 学生の自学自習を促すための工夫（A）

学生の自学自習を促すためには、学生の理解度を把握することが必須となる。既に復習小テストを可能な限り毎週実施しており、授業中に一人ずつ自学自習状況を尋ね、よりレベルの高い成果が身につくように学習のポイントをアドバイスしている。改善が見られない学生については講義内容を総括させ、自己の弱点を克服する形でのレポートの提出を義務づけている。さらに、本年度は一部の講義で予習を評価対象にしたところ、学生の積極的な学習の取り組みが確認された。

#### ④学生とのコミュニケーション(質問への対応等) (A)

本学の語学系の科目では習熟度別少人数制が導入されており、学生とのコミュニケーションを持ちやすい環境が整っている。授業での質疑応答には十分な時間を設け、学生の疑問はその時間内で解決するように努めている。全員への個別面談も講義時間内に順次実施し、学習のアドバイスをこなっている。個別または講義後でないと意見が述べられないような学生についても、個性に合わせて対応している。授業後や授業時間外も要望に応じて教科書の音読練習やICTを活用したオンライン補習を行い、学生の満足度を高める教育を実施している。

#### ⑤双方向授業への工夫 (A)

習熟度別少人数制の形態を存分に活かし、学生全員が毎回の授業で1回以上発言することを原則としている。学生を指名して英文の訳出や音読をさせ、問題点を指摘するなど、積極的にフィードバックを行うことで、学生全員との双方向性の確保に努めている。個別でないと意見が述べられないような学生も散見されるために、授業後や授業時間外にも対応できるような機会を設け、あらゆるタイプの学生が双方向授業へ参加できるよう工夫している。

### 5.学生授業評価

#### ①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

授業評価アンケートの質問「授業時間以外に、この授業の予習・復習を週当たりどの位行いましたか」で、自学自習時間が確保できているかを確認し、復習小テストを可能な限り毎週実施して知識の定着を図った。確保できていない学生にはレポートの提出を義務づけて学習効果の定着を図った。

#### ② ①の結果はどうでしたか。

復習小テストにより、知識の定着が図れていることが確認できた。自学自習時間が確保できていない学生のレポートを確認すると、学習効果はほぼ定着されていることが分かった。

#### ③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

学生が、英語でのコミュニケーションを図るためには既に展開されている授業およびその予習復習がいかに大切であるかを強く認識させるための取り組みを積極的に行いたい。特にICTを活用し、実際のビジネスや研究で英語が用いられる場面を共有し、学生が卒業後に英語を使って様々な状況で活躍する自身の姿を想起できるように促す。

### 6.学生の学修成果

#### ① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

生命・環境科学部の学生が英語によるコミュニケーション能力および英語学習意欲を向上させるためには、外部の資格試験を受験し学習効果を確認することが極めて重要であると考えられる。本学で計画されている年1回のTOEIC学内受験は英語のコミュニケーション能力を高める機会として極めて有効であると考えられる。その成果を十分に解析し、学内受験の機会を増やすなど、キャリア・就職支援課等の関連部門の担当者と相談したいと考えている。

本学には海外留学経験のある優秀な教員が多数在職されているので、そのような教員の方々に依頼して、より効果的な英語学習方法の獲得に関する講話もお願いしたいとも考えて

いる。

本学の習熟度別少人数制の英語教育の利点を最大限に活用すべく、非常勤講師を含めた英語教員間で授業の録画の共有や定期的な意見交換会を行い、教育の質を維持したいと考える。

② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

学生からの評価としては、「授業内でひとりひとりの達成度を確認して授業を進めてもらったことと、質問にも親身に対応していただいたのでとても勉強しやすかった」「大学入学後、講義中に発言する機会はほぼなくなりましたが、先生から指名される機会があることで事前学習に力をいれることができました。間違えてしまっても先生にサポートして頂けるのも良かったです」「論文の読み方についてや臨床検査技師になる上で使われそうな文など、興味をもって講義を受けることができました」「海外の論文を読む時の読解力が培われたと感じた」「単語の記憶の向上に大きな影響を与えた」等のコメント（添付授業評価アンケートより引用）があり、教育方法の効果が確認された。

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）

指導力向上を目的とし、「ティーチング・ポートフォリオ（ブラッシュアップ研修）」などの FD 研修に参加した。特に他の教員の話が聞ける機会は貴重で、学生の自学自習を促すための取り組みなどは、大いに参考になった。成果は講義に反映している。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

短期的には、英語教授法を体系的に学び、本学の学生に還元したいと考えている。長期的には、教員が自らの英語のコミュニケーション能力をブラッシュアップするための機会が有効であると考えられることから、大学全体としての支援を依頼できれば非常にありがたい。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

小テスト、定期試験、授業評価アンケート結果